續草子
中村俊定文庫
文庫 18
227

京都帝国大学図書

續華つみ

七月朔日

一點香　湖十

蚊帳をたゝむ切籠かな
けふ秋とこゝ風もあるく蚊の音　貢猶
初秋やろくろくさゝぬ乃毛　三登

一日冨岡八幡の詣て未社くゝ巡れ
付添中より彩一社を祇敬奉神
とあるといなばの文もいつの
そなたん青流岡祇空居士　三十四

関西学院文庫
中村俊定文庫

浮世塵をはらひ静寂性を天と
戻し心張はあらたまる
旧知をもとめて
新源やいとまの実乃はは亀
ふりの都をもとめ百菴
七月八日を廣る土用入 超波

二日

あさうの朝鮮責の宿りき十
ふる日や何をカる原の原 夢兆

ふる日あまとあるまた義の塚 木子
葬やきのふの都の新 祇波
相の木やつるの葉の所 且竹
刈萱ちまたへ何のたし女 翠扇
あさうの秋の原ぬる 亀
月の月のかりの小ぬる 祇原
あるまの月のかりの道 其商
ふる日や俳乃 一漁

三日

稲妻とつれ〳〵立入や言の葉 十

あやの日や友魂香や時しる 陽矢

いなの戸や陽立絶〳〵釜の音 三雀

初月の雲やほのぼの尾花や 青陽

はつ月や雲ぬき怖さまはの上 青柳

三日月の雲ぬきもの面 重丸

四日

一日長高山なほひく

入海出や拾ひ廻の秋の海 十

五日

石尊の静寂秋をちし髪 十

六日

はつ〳〵や秋の六月のよそ星 十

晩の内星はし霧の中 和推

七日

母在りし時一炷を除しへ
巧みなる手もとを忘れず
今又星美き月しらじ

梶の葉の形もなき身や悲 十

河の美やいつの掬ぶなれば 爲邦

ふ恐ろしきもとんなる迄の河 白翁

小娘や祝ひ行れ北ほ[illegible] 昭甫

なるべしる此頃や星の橋 蒐

祈恢吟

七夕や餓鬼の車ひきおろす 才牛

武蔵野すくすく細くての川 沾洌

河合や心もそのよるぬれ 木爾

七夕やすくなるむの竹の風 尹祚

山賊の取のいとや赤角豆 十

青河も飛術のうや負ぬ 潭小

布丁や寒ぬ引ぬ秋 秋文 東器

星ほや竹ちひ星のは 恵池

是合て我ぬ[illegible]　五月

[illegible]　[illegible]

[illegible]　十

七夕　昼間く伊豆の妻宮子浦　梅戸

八日

画賛

[illegible]

[illegible]　十

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

九日

[illegible]　[illegible]

[illegible]　十

十日

一夜花街すして四万六千

日の[illegible]

[illegible]

き懐す

八月のあらむ限り揚屋入　十

十一日

ちを傷むてもいまさ
已はらず

又梅を戦ふ花の莊の郎　十

追ひやり一つ水や芋の葉　素丸

いちつ乃やてゝゝりへす側のやし　蔵

子ちゝ乃ふ徐ふ乃ふ　の圭

初時やすゝきかいる境　立　百菴

十二日

赤蜻蛉今る机のいやしく　十

言藤大の後ゝあるゝ虫の壱　米仲

お曲へ張ばるゝ灯籠ゝ　芦露

ゆるゝ家ゝゝゝ秋の姿ゝ　細車

昼ゝ乃ゝ塔ゝ低ゝる灯籠　六尓

十三日

疫病やうの世のなかの所思ひ　十
むかひ火のうちに絶えぬるかぎり　俊丁

十四日

一つ殘る戾りたまの向ふ　十
なつかしの枝の梅の美濃　木曽
霊あつる契まうに菜を物洗　体輪
一升ばかり黒くやきた盆供米　有虎
菖蒲の如ばかりの向ひ　耳洞

菖蒲草を菖蒲結ひ　里郷
美柳や一万よ寝れたる事や　菖
霊柳やいつれ梢の匂ひた　舎人
孤の瓢箪ちの絶て美まり　超波

十五日

し食ひ蓮の葉を世為現　十
人の駒ひ通ひ踊　宋谷
あひれる箸を摩ひ世為　キ樹

[illegible]

十六日

送火の跡まさしく茶點虫　十

世美吉おくれ話し部り蔦

はと入くらまの中の庵　負山

十七日

蜂のうるへも哀蛤　十

見もくもも給仕の弁内部屋　龍子

十八日

かうろの[illegible]の[illegible]　吉隆

初花高炉籠の戸　十

舟うてば烟うれ杉の表　殘京

雛菓子こほ[illegible]小蜜　其畔

一月の[illegible]切籠　故一

稲妻の入日ら小[illegible]　其樹

荒磨り瞬すると　旭　沈　地石

十九日満百吟

摘華一夏速

長の夏なれども短し　毋乃親　十

孝乃あるものを感通て

夏の果を摘めるものの客親の　逸志

一夏満尾を感じて

晩や夏乃をはもしたるを　奈井

大悲のちるちるの矢とも

山田まふ僧侶や教へまひろん

放生会矢とつれまつり康おそし　竜

餞衰

一夏の光陰は百日の筆を懲りと

いへども一句の怠あはもち

なるべきなるべきなるべきなるべき

阿波ハ引墨のやまもなきまひ光

ますれるをとなれされたる利

俳未乃用をとおわり林を曳

て墓訪に幸ひ一の趣を拾ひ早め

きのそなひ

人の未曽家のいとまや墓参　十

挽

數甚窗〻廉易多人應予不計
稱名猶如多寸矣切況菴主此日
詣先妣〻墓嗚乎予所以念佛者
便是回向〻回緑乎

己百庵

笛吉〻吉〻奮世孫也佛菩の歌

追善歌仙

羽羊ちゃセッ林花の花　大湖萍
ちゃすしひ乃牛の恰合ちゃ　湖十
窓外月扇のいまし青あり　心夕
ゆ〻ゆ〻ゆ〻も桃灯ゆ清ま　老嵐
ゆ〻ゆ〻ゆ〻橋内ゆ〻ゆ〻い　雪可
はさみ羽墓の上ゆ〻ゆ〻ん　石丈

ウ

いの黨ゑ弓矢の家理ほうし　十
壽命咄しすまと常陸坊　岸
日孫くおひの穴ノ廣うり　嵐
てもしまの地ゑ狀もいとめ　メ
夫ーやとおもつ居ゑ不住　丈
鴨ゝつ沢ゑひとうし寂の占　の
村田おの迄も彦のまわし　岸
ゑ病の祈ゑ下ゑ　十

津ゑ陸ゑ関の東ノ殘ゑひ　メ
五日ゑ暮し所出智の月　丈
彩形ゑ大根費沢料理ゝ　の
ゑみ流ゑうゑ亜天　嵐
放迄鰹の艝床ゑ陸ゑ母の岸　丈
ゝく西ゑいさうゝ　岸
うゑ迄女の背毋を抑遑誠　十
櫛ゑ所ゑと芳ゝ名香　メ

姫漬ものの日の獨乃実 角
四十五 俵 の
利 ま つ け 三 く 捻 ば ち 州 藩
陽 ま ま 伯 母 こ ち ま 色 伯 母 丈
色 色 く ま ん 色 色 慶 幡 タ
贄 ま 賣 買 の 百 麻 奴 ま 角
く 紫 袜 の 実 の 色 ま 肌 十
鴨 下 り 初 ば 木 母 寺 乃 杉 の

ウ
摺 ホ ま く 桝 陸 打 ち 只 ま す 中 藩
板 の ち い わ ま 陽 服 一 間 丈
す 三 丈 三 甚 三 う 荷 ば 出 ま 可
ち あ ほ ち く と 笠 合 羽 簑 タ
む の 雪 苦 姫 迫 乾 屋 白 し 角
辛 夷 う 枝 ま つ よ ま 薮 瘦 十

追福

我師花千乃尼世に在す時下
けふ子多年したしみすくひけ
あるにいつとなくすゝみく
すゝ給ひて切字おほしをれて
俳句よくせしの付合も皮
肉骨の境をのみさにくらん
女男よりもまさしなかりし
平日おとなしく子めしつゝひをあ
それみあまさの才子達なるを
のゝ俳諧ともの数くへつるに
入つゝしひぬ我も世酔あり
啼つれすき四角なるありけよ
あり千差万別になむそれと

いたゝくへけ従めれくゝる
さま就き何にいとおさの
始を傑し告け十三絃を
かのしく風塵がちらん
且夕に情ははまりて深めむ
いとなおれし深志すらし
ますやおすてらけ家よ月在
めらゝあひて給り行しめて
さりいさをいさゝうらやま
しくおもておもひて枝日来
芸に流ての名を七国の崩
展筆に近せて昊前おねまる
乃み

孝陀や松掻ねらんて秋の風
雪中菴

揚初ふ一巻を文の高灯
篭と世のくの乃耳ふ孫を
なりけり句花千灵尼の秀作
満月の日よりあふ文乃か
もしのよひて基と称とし
かくの六くの月ものさとし
七周忌の追福ときく孝子
巽離斎作善の一集を
はくふ予に其俳連
のすすめならんとく皮佳吟

を洗てあてもて
捻香のうつりけり　才牛

涼しさを出て見ぬる灯篭　湖十
稲妻のもふふ
終に青月雪餅を焼なるみ　老鼠
艸の庵やとふふ　牛
殷し場を低き厠のひくく　十
壱七仰走の崔を鳴　鼠

居風呂すなはち蟄女のまこやりま　牛
出もはなはだ秘めたる人のみ　十
今日こゝに裁する何ぞかぶらこと　鼠
まぐ前髪の乃ゑの青こて　牛
白心算我も三日の冥冥　十
生　昼さしよ席舟蔭　鼠
喰こほす側こせはおこを瓜　牛
鼻もつかさいこ刻む大蒜　十

部屋方のむつきまの陰より　鼠
朧月東ころゆるゆる原　牛
なのるを蛇の居床乃も盛　十
躑躅ゝ枝ゝ仙乃什　鵜　徳辨

此巻至斯夜雨菴主有微恙故
其吟未成而止矣然其儘出之
爲一編之模様者也

一七句帳の浮揺まさて予も
貳の部坊とせんすりむ千尾ふも
岩陸小姿とすりて七つの石を
てるるせ七種の新向とせす
むしかし思ひやりて七団の
ものの向の体のるもの

七種を和氏とせ所のもはせ心タ 秋
ゆ下ろ琉璃の扉を廿扉也 日意中
小車ゆめくりむふや七浄華 日雪可

追悼哥仙

孟蘭盆ゆ迎き蓮の花ゆり 文石、
色ゆも寄けまゆ揺ゆ珠数 湖十
炉の笠ゆ焚くゆ煙のやきて 里郷
迎ひ手ゆ下ゆる乃嘶 石
岩盤ゆ小ゆる城の青苔 十
ちくまけゆ筆ゆめく 里

ウ

ろ枕くさ氣の付く伯母の土産ぬ　石
放し雀ひちりくさ飛ん　十
神木の素柱乃荷し茶屋　子
駕て通ふる誰やらう姫　石
扣剃まの殿原の為ぬ　十
帯も羽織を出える六月　子
火の端で鰹をおろす船の内　石
艸刈笛吹祢宜の樂ミ　十

子昴ものを引抜伝へ　子
声ふ聞くれまる原者の居人　石
月雪れ故郷ものを　十
くるるす籠を抱児に付　子
初午のいのりあるき髮結床　石
機嫌ぶるめ内家ら爰　十
戀すてふ黒羽二重乃溢裂を　子
灯ともす国の飯汁　石

[illegible]十
愛相[illegible]世方ヲ
氣遠ヲ其上狐[illegible]ヲ
三河ヲ掛し矢別ハ橋十
思ひはとるい小粒乃老り所ヲ
瓦附の幕ヲ星ヲ三日月ヲ
使て二度ハ伺め唐出十
痩し比丘尼の肌ヲ襟ヲ

ウ
生木綿ヲ桐ヒ[illegible]字の[illegible]麻子ヲ
縁むすひ[illegible]三輪の古枝十
ヲ人ヲ[illegible]ヲ
もくさの上[illegible]白[illegible]ヲ
涅槃像ヲ軸ヲ[illegible]十
ヲ一通り法の[illegible]ヲ

彌陀經のもとの如月の姫　冠阿
世苦仁の月のもつ所の前　一字
ろうへの名すも咲るゝ中の如　詩十
あまの原ふりさけみれば　ホ子
閑伽桶の底一川の月　千〻
沉香の姫の祖やもゝ　巽魚
ものゝ中ゝ昊の膳　侯中

追薦哥仙

みそらきやんの芝る花ちる　伴輪
義虫のけとゝくはの月　湖十
砧ゝ是が関ゝの芝屋　逸志
ゝて仕ゝ里乃夕紙　舊室
唐犬の人ゝ向ての柔おさ　貢橘
旅てなくてゝゝつ裂羽織　老崩

ウ

翌建る普請の中乃州い乱れ其樹
伐へ上ッて〳〵 浦の評判 狗
おろ〳〵も辮を抑れた皆尸十
果ぬ軍と極せてもほへ志
贄付を知らの黒いめ丁家
傍士の手傷夕暮を出る楷
又ものみを落〳〵と穿きま嵐
賣なる月のもまり樹

いつ毎いるる附くのとぐろ細狗
花の陰まの酒のたるぬ人室
投ずる白子さこ海の新地志
初午の夜寺乃葬十
名
裸ッ子家狭炮をおつき楷
屋おて〳〵おの席夫婦を狗嵐
仕ひる時下前はさむ張人立樹
糸のくるみ乃毎巻の詐狗

桂枝の涼より三尺の桂支　室
送り火のうらが初秋のもてな　志
船頭の拳て割る西瓜十
踊を伊勢住吉廉島甫
席即位の職人方の朽の月　橘
保子廃るとり見の果　樹
優婆塞の簾乃うつるあつづ　軒
風鈴の涼ふ廃る餅の上十

ウ
四月まて待ちそ暮なる　志
乗ふ夏の庭憩　室
黄乳の時ふ乃あをつるを　樹
入院とあれ乃ふ乃ふ　軒
人毛心の都出来新し　甫
華ふ乃ふ桂の一枝　橘

[illegible] 木函
[illegible] 杉木 [illegible]
[illegible] 知山乃
苔の [illegible] 国女の
塚も [illegible] 厳寺乃 [illegible]
[illegible] 両尼 [illegible]
[illegible] 因縁 [illegible]

蘭菊もすもひ [illegible] 竹籠 [illegible]
[illegible] 向 杉 [illegible]
[illegible] 楽音樹 松 [illegible]

追善哥仙

[illegible] 盆 [illegible] 編笠の図 両 九十
菩提 [illegible] 乃 [illegible] 杉 [illegible] 十
路所 [illegible] 玉 [illegible] 老 [illegible]
[illegible] 九
[illegible] 戸の香乃 [illegible] 十
[illegible] 衣紋 [illegible] [illegible]

ウ

息吹を吹き出す部屋の格　九
おぶ山の千俵の荷義　十
塔頭を作る紀ノ国屋　甫
金神を祭る銀の大黒　九
吉五人庭を出る男の図　十
恨むは秋の三ッ四ッ　甫
そらく世の笹乃雪　九
有僧達を皆　とまり者　十

七ツ色の糸の一乃枝川　甫
泥隈の人形おぼろ月　九
猫の子乃妻恋猫を送る　十
編戸の引抜を人やなむ　甫
名
連雀師を雪の日を人形　九
通り仕出の西を法輪　十
手拭を白ミの赤ものあり　甫
ほうるまるゆえ蝉の鳴ら　九

新造の下端を止め枕もと十
さゞ波くゝめ誓文の八坂嵐
今の昔いうぬ貪の指を折り九
ゆの葉て廊を塞ぐ十
浮渡り橋まを向こうの月の富士嵐
心中ひとり孤ふふ九
沈香をたきしめの観世音十
大坂瓦の花弾の節形嵐

ナウ
ほれた花と朱鞘もつて九
しろを向く神ぬの昼飯十
宵祝の川へ捨て原の船嵐
庄屋をば紙なて斤言九
京焼の掛花生の宿の寂十
門の外すも両りてひす嵐

花千尼七週忌をとむらふ
老嵐先翁へおくらふる巽子
句の一集を思ひいでまゐらせ
昔を思ひいでまゐらせ

嵐尾草の家を拂ふ拂子　整羽
法といふ字の踊帷子　湖十
畫の月拔き窓の漕出て　左十
俳の小口ぬらすなるべし　其裔
実桜を第壱とあるべなし　樗立
返事まゐらせ調市戻す　杉虹

花千尼七週忌をとむらふ　梅戸
らふの句集でも自ら思ふの園　陟川
形七ツ子ふる向ひくるふの蓮　冬菖
七ツ七の紙くるる扇竹籠　慈恩寺　堵十
七ツ子真あるしかい立枕蓮日之舟

追福奇仙

ウ
殺刹にめぐられも自剃のあら海れ　老嵐
洗濯物の壓にあり琵琶　心酔
泡盛を吸ふ汁なる酒でらし　枫筆
常香盤にし一日の塵　其樹
咲夜に見ぬ夏の起る弘徽殿　十
悲しさはちもなむ金にちなむ　羽
硝子の障子に大工ひとり出し　斎
鍬を踏みてあらし褌　左

錆なし余むなかしやく宮の箔　虹
まづしきを咲けば西行の弟子　嵐
冬の日に弓張月を弾ておりり　樹
かむばり帰し猿の編笠　十
名
樟脳に氣の上りける般若櫃　左
猫有逃しの無地を繰出す　斎
女房に妾の義理の律ぎもの　羽
やかましく泣くさすまたを讀ム　虹

髮ゆるまつまきはの神の日　嵐
苅て捨ぬもみも　舞　尤
弘法の大るゝ　芋乃秋　十
減を悔の順礼の　梅羽
はるゝもの敷毒散るお　茶虹
五十ゆ木　豆　松　尤
松島て高館の氣乃奢　裔
大盃へこぼれ前　髮　梅

名ウ
唐衣の矢束仕過ぎてあき　羽
てしれんていこ紙まんの人　尤
二疋宛追考る墨絵の　嵐
降ぬといふ　ぶれ捨ぐる　虹
なるたゝいつのあるす香一　裔
琴ゆるゝ惜む蕗の苔　十

[illegible]桃下佛[illegible]　[illegible]

小車の花乃[illegible]忘れ[illegible]

七夕の[illegible]短冊[illegible]　[illegible]連

[illegible]の[illegible]十すぢみ　封示

吊[illegible]すの[illegible]の[illegible]　橋五

七[illegible]ほ下[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]と[illegible]の[illegible]　茶井

追歎奇仙　魯兆

[illegible]蓮のあ[illegible]

[illegible]盆の[illegible]　[illegible]十

踊原町[illegible]町の[illegible]　淡中

豆腐の[illegible]組板[illegible]音　杉風

雷の[illegible]の脚　[illegible]南

臼乃古[illegible]鍵の数　一字

炭賣の白髮はかりすの使十
ちゝ結都乃ちをとんてゝ来ん 兆
芦の湯て垂れそ袋なめ出るん風
ひゝつ者を五間ゝ亨ゝ中
前垂乃上ゝ抓出おおひ字
袖中島を月の揚げ南
船の寄ちの形ゝ寄ゝ其樹
明子仕掛所 陵乃陰十

鞍壷ゝ抱ひの札乃表張り兆
伯大工を花の夕昌風
張弟を俯すゝ雑祭十
天男ゝ千ゝの隆ふ樹
名
能書ゝ長命を曹ゝ打ゝ南
塔和断ちけち凡願掛ケ字
後ゝ続ゝる袋九郎十
旭春女也て寄る言波兆

沢合を市葡萄籠に盛り撰出されし
酒力好すてぢんぢやく殿　中
大高子蒲萄の手遊通り　樹
破園も庫裏乃秋　〃　有
堀井戸の中ふるすむ夜まの月　字
言尾を巻阪落さう嘘十
数て小判却くを拾ひ　兆
住連なつゝえる荒神の餅　〃

ナラ
ゝの景赤笑の梅乃出盛さく　中
勧学院て筆屋伝れる　樹
祝日の外関作ふ皿砂神　有
枕をおくみとりゝの形り　字
花の仰乃砂の幹曳く真　裸　老嵐
ゝもはゝくはくめつゝら　樹

道の奥 孤屋の上をはらう　舊室
掃待ち侍る法の蔦かな　其樹
向井のむや七字の岩つめ　蔚十
かくるるものの調べ　巴の子　桟丈
緑の珠数や仲高の墓　五彩
いろいろぬ桜かくれの井　廻泉
七ゝ七夜校を授る也　千怒
落墨の石ゝ向の句　青柳青青青　青午

追哀寄仙

多ゝ地獄の風の吹き出仏誓　岷乗
ゝ灯篭を房のもとに　潮十
窓の外童乃声の月淋く　車契
宿を借さぬ細雨　老蒐
蟹形ハ青物の色ゝ乃色　敬由
ゝ鰯ゝ　恵風

一[illegible]江戸の惡　十
誰誠より笑ひ出す　宋
屋敷おそいろ〳〵の仕出しるものを　蘭
念佛題目すり書ひろう　堺
陽揚る駕籠乃月の裏藤待　洒
敷巻の部　洒[illegible]る　由
おそろく出舟を船る浦人や　宋
と洒む　洒も五六斗の塩　十

名
もの〻竹の世乃上風を淺ましく　堺
蛾入ものゝ中引詰て　蘭
下戸めの花の新色　袖の裏　洒
待て〳〵堀もと聖一箕　由
日の居ものゝ子中ぬゝ松原　蘭
喪ものゝ新立の頬　宋
盆前の味を[illegible]の多　十
氣を[illegible]て[illegible]川ゆム　堺

輪掛の名もみなとの打波 由
羽織の嘘を蟬の羽衣 俳
都人いさ麦飯を恥めも 宗
俳諧の亭の名を指折 蘭
きゝ文の錢も光る袋ゆゑの上 染
日向臭さ牛あつく毛氈 十
夕月に涙の声殿ひも静 由
蜀黍のはなもくもりは

ナウ
南瓜よ瓜の瓜の瓜を誰 蘭
布施をしく大塔 宮 宗
炭竈の烟る日の暑ひ哉 染
一るゝを千物花聲の雲 由
掛打牛女の力くい加減 俳
靨試む あののもろふ 其樹

ちとせの日もかゝる縁やかな目　柳糸
みのはおやこそを書る筆も　波翠
扇面日すも忘れし珠数袋　竹十

花に尼もくまうはひまなかりける折ふしちゝせさるさかまうれしきたくる山の調をきゝしもすむと思ふはからすありけるかしも心めてもの実がある絵とて此て来る事向をへつとめ

面影のさらにはりすさひ流ゆく
いつれの法よりくらゐまさん

追善哥僊

手向ける蘭の匂ひの咲きまゝ　木十
二十六夜を月の桂進　湖十
蟷螂も柱にのほり軒しく　栄翁
宴なき吟ふ留守の人を窺ふ　鳥道
嗜の襄着るほとの雪釣し　封尓
煤の障子を隈す夕汐　湖連

馬朝夫なるものから所の朝十
乃至女房の寝を窺ふ巻 ホ
拍前の廊乃すゝきやまはを
脚の拍子なる醫者の陸尺谷
筋違ひ三日目はむとこゝろん連
汗を拭ひはゝくこゝる羅犬 ホ
追風を負ひ毛物を問屋お其樹
又ゝ景清うはは十

舟て焚海士の烟を見まく ホ
皇居乃沿の花乃山越 ヲ
薫咲と氣こゝひ出す香薫散谷
名
物の巣殖れまるの赤樹
ゝゝく讀誦みゝる見の身 ホ
浄瑠璃庵前絵ても大造連
彩枕屏を通すと口ゝけ十
通り遠ゝゝゝゝ烱臺 木

真中へ三味線弟子樓船色
猶を艸もゝ浅の白雨谷
造営の家の部乃握り墨樹
おもすて山の紅やけの自示
ふしもみまゝ蘭生の連
乞食の内もさく初汐十
僧正の五尺の衣掛松乃木
まゝ侍乃笠結ひまゝを

肝心の而もいつも後ゆ谷
先一ト祈　意の詩合樹
敬まいも上戸の嘘もふ使し示
儀で元旦美盤の裏連
厨すまゝもとゝ都盛老蔦
雇男ものよひ作樹

追福寺仙

[illegible]墓[illegible]心　木爾

[illegible]の二十七日　朔十

[illegible]やさしぬん　文十

[illegible]の寂[illegible]窓　老嵐

[illegible]光る何[illegible]て　園二

赤靖[illegible]乃　[illegible]る夕先　茶井

宿人のうつる碁をあらそひ　十
鎌倉　反　乃ちろう強ちく　兩
ほと柏子より　や物類を拔うう　甬
やりを仕ぢく年の市立　文
血をたゝぬく寺ぬけぼの用の月　井
誠といの字はり合ぬく　二
回廻ぬく梵灯庵の松ぬちる　兩
絶ぐく久しく　禪のぐんぐい　十

幕の紋　移ぬ下を飲　文
江戸と在不を天秤ま拔　甬
とこぬいの郭　橋戸まんと　二
名
いやよひ　四日　内侍小侍從　兩
大内于味方の陣も敵乃陣　井
呵つぐ月れぬぐく落ぬく　文
堺町をぐく走し　菅屋丁　十
裏の抱や多保る藍　二

竹掛る岩より石ゝ多の音　蘭
鹿呂を倒まに献立の外　井
引志ほる人の姿ゆゑ　爾
緑青ぶる蔵王權現　十
菊雄斧の光を重ね　文
祝の海成　祝く三月　蘭
二番ゝ浮ゝ釈の頂と　二
鉢いる居乃赤さゝ枯　井

ナウ
樓ゆゑ盃うゝ仲津彼　十
長飛ん翔かゝの行く宵　爾
手拭を志ほり切るゝ力をゝ　二
笑ひあゝ仏の賀礼文
懐旧蝶もの荘厳調ふく　井
彼岸必よいほとの雲　其樹

軸奇仙

昔の穂やなもと七府の向州　老蘭

むかしのもとをしたひ火のもと湖水

裏底あるものの敷拵すまく、

西日はもゆるを二日三日自蘭

池の水紀綾の陸の京の都、

うけ物の絶えぬ炭屋のまる　十

紙雛乾魚のうるさきまで 十
宮ゝに居も肖貧せて老る 蔦
筆先ゝ所を書初め、
老ゝ人の飯いそぐ 十
ほれ〳〵と虎ゝ席の出来上り、
ゝゝ水やゝ水ものうり 蔦
人参の売ゝ桃のすゝり、
戎講ゝ俳諧の桃太郎 十

初雪の降ぬ内ちれゝる客の目、
只ゝ山ゝ飛ゝ温泉の庵乃音 蔦
臼那の泊付る梅花誘ふ、
烏寝る乃ち所乃ち行、 十
けゝゝゝ波寄のゝ山ゝ心者 十
風 龍山を横ゝ漕舟、
衣寒のかゝ乃ゝ下笠 蔦
一ト言出せゝ百舌ゝ鳴ゝ、

と思へど止め難かれ十
うんな畠の里芋乃艶
照る月や列なる犬ら尾を振て 蔦
ゆるゝ霧られるあるへ来い
毬毫多く真のちくちる白拍子 十
思ふ所へ也 はちすはす
ゆるも花菖蒲の拍子の型 蔦
市なると立ッ中ゝ川宿

ウ

西の海志は尾ちの尾の下 十
因庭の上て利休ちいさい
吳ゝ竹ゝ竹ゝ竹ゝ 蔦
黒ゝ庭は編笠小枝
花の波立橋うけて寺 泰 十
すみ迄の中乃はちすけの産摘

[illegible]七月二十有七日七毋七月
[illegible]
諸沢懐旧頻[illegible]家下の百[illegible]
[illegible]の舟はゝ〳〵 橘矢 湖十

同

[illegible]三世の仏〳〵 [illegible] 逸志

以一編效前花摘之例而以
宝晋齋之筆意 其樹摹書

黄暮直賦王稚川未帰云
慈母毎占烏鵲喜吁嗟
今茲享保二十年乙卯夷則
二十有七日花千尼七回忌
尼者巽湖十先妣也噫為
巽子占烏鵲喜六七年前
噴流光荏苒艸霧喪嗚

烋較凄凉維時維日巽子
不勝追遠之思欲表寸誠
昔晋其角此有其哀一夏
結縁百唫名之花摘巽湖十
篇傚之為續云

午寂老人跋

享保乙卯年上秋下旬
巽湖十撰

武江書林
須原屋清次郎
西村源六郎

皇都書林
京堀川通錦小路上町
西村市郎右衛門